



Member's Open Space



## 昭和初期の頃の浅草六区（その2）

●美唄歯科医師会会員  
雨田 実

浅草六区について拙文を綴らせていただいたところ、ご年輩の先生から戦後無くなってしまった名物の大池（ひょうたん池）についても少し、どうして無くなってしまったのか残念でならないとのご指摘をいただいた。「大池を売って場外馬券売場を作らせて、その金で観音様を再建したようだけど、随分思い切ったことをしたものですね？」と未だ浅草に住んでいる残り少ない友人の一人に聞いてみたところ、「色々と言句はあるだろうが、関東大震災にも焼けなかった観音様を、どうしても建て替えるためには、あの時点では止むを得ない選択だったんですよ」とまことごもつともなことではあるが、池を埋め立ててしまったのは悔やまれてならない。浜本 浩の小説を映画化した「浅草の灯」は池とオペラ館と公園裏とを舞台にしたもので、昭和初期のものだが、中身は大震災前の話に違いない。デビューしたばかりの高峰三枝子は美人で品がよくて歌が上手だったが芸のうまさは今ひとつと思われたが、それがかえって新鮮で純情可憐な踊り子は、まさにピタリのはまり役で、ディアポロみたいな扮装をしたインテリやくぎの若き日の上原 謙と、ペラゴロ役の夏川大二郎（夏川静江の弟）とが、彼女を張り合うのである。その鞘当ての場所が公園の大池で、藤棚の向こうの池の水に浅草六区の灯が映っている。ペラゴロとは、当時大流行の浅草オペラに熱をあげて、ゴロゴロしていた若者たちのことである。

活動からトーキーへ、昭和4年ごろから、ト

キー、トーキーという声がかかって。もう弁士はいらないということになって、昨日まで看板だった一流の弁士が集って公園劇場で旗揚げした。それが後の常盤座の「笑の王国」になっていくわけで、一流どころが皆で芝居をした。そばの金竜館では浅草オペラの始まりでオペラ専門。座長は田谷力三<sup>たやりき</sup>で、町田金嶺<sup>ちんたい</sup>、藤村悟朗、清水金太郎<sup>しみずきんたろう</sup>、相良愛子、木村時子などいた。そばの三友館でもレビューをしていて、座長は波多野栄一で、林 一夫、森川 信、高井ルビーなどがいた。昭和4年に旗揚げしたカジノフォーリーは、客が来ないで2度程ポシャっちゃったけど、川端康成の書いた「浅草紅団」が評判になったりで一躍有名になった。カジノフォーリーの演<sup>だ</sup>しものといえば、ナンセンスを元にしたパリ風な粋で新しい軽演劇、時には歌と踊りをアレンジしたミュージカル。それが当時の芸界になかただけに「カジノフォーリーを見ないで後悔するな。それゆけ、やれゆけ」とばかり大変なウケかただった。そこへ後で喜劇界で有名になったエノケン<sup>えのけん</sup>こと榎本健一が入って来てから昭和8年にエノケンが松竹に引き抜かれるまでは、大変な大入りだったが、どこの小屋も主役がいなくなると淋しいものである。

そこへいくと御大<sup>おんたい</sup>、田谷力三のもと安藤文子、戸山英次郎（後の藤原義江）、木村時子、バレーの石井 漠、高田せい子、松島栄美子その他多くのスターを送り出した浅草オペラ館はたいしたものといえる。私は浅草オペラ全盛の頃、ペラゴロに

なるには幼すぎたが、それでもよくオペラ館には出入していたらしく「岩にもたれた物すごい人は鉄砲片手にしかと抱いて」というディアポロの唄や、「ペアトリ姐ちゃん、まだねんねかい」「恋はやさし、野辺の花よ」など、今でもつい口ずさんでしまう当時の歌は、みんなこうして覚えたものである。トーキー映画になったら、初音の点で大河内伝次郎などは九州のおおいたべんの大分弁だし、はっきりしない口調だから、だめだろうと皆に思われていたが、彼の当たり役、丹下左膳で姓は丹下、名は左膳と独特の節廻しとおおいたなまりの大分弁で、私達子供にまで口真似されて大変な人気だったのを今でも覚えている。

## 男装の麗人姿でターキー出演

昭和5年9月11日、浅草松竹座で開演した松竹オンパレード（川口松太郎演出）に水の江滝子が出演。ターキーの愛称をもつ15歳の彼女はショートカットにシルクハット、タキシードという姿で司会をし多数の若い観客の心を捉え、スターダムにのしあがった。松竹少女歌劇の前身、大阪松竹楽劇部が「アルルの女」を上演したのは、宝塚少女歌劇に遅れること9年の大正12年5月であった。この時はいまひとつ物足りなかったが大正15年の春のおどりが好評で以後毎年上演され、道頓堀の名物となった。昭和3年に東京松竹楽劇部が創設され、第一期生が募集された。この中に水の江滝子が、翌年の第二期生に津坂織江がいた。東京の楽劇部で画期的だったのは昭和5年2月、春だ踊りだ!!踊りだ春だ!!のうたい文句で、このころとしては記録的なロングランを樹立した。昭和7年11月、松竹少女歌劇部（SSK）と改称され、東京劇場で「らぶ・ばれいど」を上演した。時に築地川をはさんだ新橋演舞場では宝塚が「ブーケ・ダムール」を上演していた。宝塚のファンは山の手のお嬢さんが多く、松竹は下町の娘さんが多かったといわれた。昭和8年6月に浅草松竹座の松

竹少女歌劇部員、いわゆるレビューガール約230人が人気絶頂のターキーを委員長としてストライキに入り、湯河原に籠城して話題を呼んだ。ストライキが解決した昭和8年10月、東京劇場で「タンゴ・ローザ」が上演され、ターキーの伊達男役が大好評を博し、160回の公演記録を樹立、松竹少女歌劇の黄金時代を迎えた。昭和12年7月浅草に定員4,059人の国際劇場を開場、以後ここを常設劇場として長期にわたって帝都の人気をさらったという。

水の江滝子の相手役は小倉みね子というスターだった。ターキー去った後は、川路竜子、小月冴子などを覚えているが、男性が女性になり切って演じる歌舞伎の反対に娘が男性になり切って演じる少女歌劇は、戦前の大和撫子の多く存在した頃に比べて、今の時代には浅草に出来ても往年のようなファンは集まってもらえないのではと思えてならない。

